

昭和十年五月廿三日第三種郵便認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日逓信省特別授承認可第三五二號
昭和二十九年一月二十五日印刷 昭和二十九年二月一日發行

第二十卷

二月號

建文

二月號

淨

土



無駄

私事で誠に恐縮だが、私の末娘、小學校の一年坊主。食事の時には、未だにたべこぼしをする。一夕、食事のひととき、お茶を飲みながら、それをたしなめるつもりで、長々と「もつたいたい」ということをお説教した。なまかぢりに、お釋迦様まで引合いに出して、ものを無駄にするのとが、どんなにいけないことを、^{じゆんじゆん}諄々として話してきかせた。ものみな、そしていきとしいけるものすべて、凡ゆるものが、それぞれの役目を持つて「ある」のだから、それを「生かして」使わなければいけない。お米は、人が喰べて榮養にするためにこそ「ある」のに、

「それをこぼして、捨ててしまうとは、何ごとですか」

そう決めつけてみたのである。ところが、その隣りに坐つていた、小學四年生の長男、

「ネー、お父さん、世界で一番無駄なもの知つていたづらいいぼい目をクリクリさせて質問した。いさゝかしやくに觸つたが、知らない。話の泉でもきいて、「萬里の長城さ」なんて答えられたら、親父のこけんにかかわるので、反問してみた。

「お前、何だと思ふんだい」

わが倅、端然と、答えて曰く、

「世界で一番無駄なのはね——人間が生きていくということさ——」

× × × × ×

本年早々の巻頭を飾るには、いさゝか落語めいて、相済まぬ次第であるが、自ら顧みて、自らの生存の「無駄」でないかと自負し得る人、はたして幾人いるだろう。小生などまづ第一に兜を脱いでしまふ。

(竹中)

筆 隨

風の如く去るもの

吉田絃二郎(1)

長壽法と放屁

石橋戒道(8)

豆 ま き

村田嘉久子(27)

小消息 講義 宗教者の時代意識

佐藤賢順(4)

譯 意 初 夜 禮 讃

吉田定久(24)

新しい寺の
行き方(2)

童心と宗教

一 談 一 鼎

佐藤良智

北條淨善(10)

竹中信常

現代に再現された臨終行儀式

K(15)

——森本夫妻の盛儀に列して——

Yちやんのこと

須藤隆仙(18)

評 時 や く さ

高瀬廣居(22)

説 火 にも焼けぬ袈裟

鶴田湛泉(29)

芝園だより

表(三)

保育ニュース

(23)

表 紙

松濤達文



風のごとく去るもの

末田 紘二 氏

終戦後間もなくであつた。わたくしは武蔵野の雑木林のほとりの荒れ地を開拓してゐる背の高い中年の男を見た。かれはいつも黙々として荒れ地と取っ組んで働いてゐた。

かれは農家の一部分を借りて、數人の家族とともに住んでゐた。かれは五六丁もへだたつたところを肥料をかついで耕作地まで通つてゐた。

かれは將校用の乗馬ズボンを着け、時としては長い乗

馬靴を穿いてゐた。

かれはいつも柔和な顔をしてゐたが、どこかにさびしさを漂はせてゐた。かれの乗馬ズボンや乗馬靴や、その丈高いからだつきから判断してわたくしはかれがかつて軍人であつたかも知れないと思つてゐた。

かれは素人百姓にも似ず着々と收穫をあげて行つた。わたくしは夕方の散歩路でよくかれが、背負い籠いっぱいにトマト、茄子、キヤベツなどをはこんで來るのを見

た。

わたくしたちはいつとはなしに黙禮して行き過ぎるやうになつた。

かれの子供たちも散歩の道で逢ふと、丁寧に黙禮するやうになつた。

ただ一度かれの母堂だけがわたくしの蹣跚たる足取りを案じて「御散歩にはお女中さんでもお伴れなさいまし」と話しかけたことがあつた。

人の心のすさび果てた今日このころ、かれの一家の人々の存在はわたくしに温かいものを感じさせた。

夕暮れの散歩にかれの家の子供の一人にでも出會へばわたくしのところは満たされるのであつた。「この冷たい世間にもどこかの家庭には昔さながらのあたたかい人のところが残つてゐるのだ！」と思ふだけでもわたくしはこころのぬくもりを感じるのであつた。

しかしわたくしはかれともかれの家族の人たちとも、逢へばただ黙禮と微笑とを取り交はすばかりで、かれの

名も知らず、何を職業とする人かも知らずやがて七八年の歳月が過ぎた。

ところが數日前のことであつた。わたくしはいつものやうに夕暮の散歩に出かけて行くと、かれの家の前に雨覆ひをした大きなトラックが留つてゐて、家財道具が積みこまれてゐた。長身のかれも若者たちといつしよに荷をはこんでゐた。

わたくしは黄昏の道をただ一人歩いて行つた。

「どこに引つ越してゆくのか知ら？」と考へて見た。

トラックの運転士らしい男がわたくしのうしろで「四時間半くらゐでせう」と語つてゐた言葉だけが、いつまでも耳にこびりついてゐてはなれなかつた。

わたくしは東京から四時間半行程の距離にある町々をいろいろに想像しながら夕闇の道をたどつてゐた。

わたくしはその翌日もかれが住んでゐた農家の前を通り抜けて行つた。しかしかれの姿もかれの子供たちの姿も見えなかつた。

わたくしはさらに雑木林の蔭のかれの耕作地のほとりを通り過ぎて行つた。そこにもかれはゐなかつた。かれが丹精した野菜だけが霜に痛んだまま暮れてゆくのであつた。

わたくしは毎日武藏野の片隅を、耕作地を、雑木林の小徑を歩くであらう。そしてやがて秩父や丹澤のはろばろの雪をながめてはかれの黙々たる姿を想ひおこすであらう。やがて幾度か冬が来て、冬が去るであらうが、わたくしはかれを、かれの母や、かれの子供たちを忘れないであらう。

わたくしは人生のゆくりなき離合の尊い機縁とさびしさについて思ふ。

たまたま武藏野のそぞろ歩きにめぐり逢ひ、そして七年、八年の間、黙禮を交はすだけで、風のごとく來たり風のごとく別れて行つたかれやかれ一家の人々とわたくしとの間にも尊い機縁を感じる。

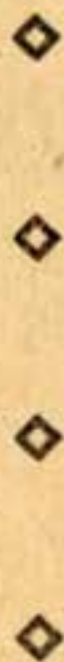
信州六里ヶ原で逢つた高野山遍路は、芒の小徑に佇ん

で、わたくしが見えなくなるまで合掌してわたくしを見送つてくれた。わたくしは三十年後の今日なほあの遍路を忘れない。そしてあの遍路を思ふごとにわたくしの心は淨められる。

浅間をつつんではげしい雷が鳴つてゐた。それは地軸を裂くやうなものすごい雷であつた。日は暮れかかつてゐた。その恐ろしい雷鳴のなかを靜かに、黒雲にとざされた草津街道を浅間の方へ登つてゆく老雲水があつた。わたくしは寂然たる老雲水の姿に思はず合掌した。

それは三十年も前のことであつた。しかも山を越えて行つた老雲水の姿を想ふごとにわたくしの心は今日なほ肅然たるものを感じる。

風のごとく來たり、ゆくりなくめぐり逢ひて、風のごとく去りゆくものの尊い機縁である。



宗教者の時代意識

——法然上人「小消息」講義(二)——



佐藤賢順

末代の意識

小消息の中の重要な問題は、前回の講義で取り挙げたように、大きく分けて五つに整理されるでしょう。今回はそのうちの第一の、宗教に生きる人の歴史観及び時代意識についてお話ししましょう。本文では、初めの「末代の衆生を往生極樂の機にあててみるに行すくなしとても疑うべからず」から、「法滅以後の衆生なおもて往生すべし、況んや近來をや」というあたりまでのお話です。勿論、小消息全體、いや淨土教全體の根底をなすものがこれからお話する時代意識ですから、どこからどこまでと切り離すのは、一應の便宜上のことであることは、いうまでもありません。

救いを求めて宗教に生きようとする人は、自己の現にある姿に對して鋭い批判を加えてゆくばかりでなく、現實の社會の在り方に對しても、現實社會がこうなつてきた過去の歴史に對しても、假借かりかたするところのない批判を加えます。自分は我欲、私欲に充ち満ちた、何一つ能力のない、罪惡の鬼のような人間である、これが人間の本とうの姿である。人間がこんなになつたのは時代が段々と惡くなつてゆくからである。時代は教主釋迦牟尼世尊を離れば離れるほど惡くなるのである。——こういうように、自己批判、社會批判からついに教祖に對する熱烈な追慕、憧憬となつてゆきます。或はむしろこの逆の言い方をした方がはつき

りするかもしれませんが。教主に對する熱烈な思慕、景仰が釋尊の御在世及びその弟子達の時代を、歴史上で一番良い時代であつたと考えるようになり、それから遠くなるほど世の中も人間も悪くなつてゆく。世の中には疫病や飢饉や天災や戦争が絶えなくなり、人間はあらゆる罪惡の數々を重ねるようになる——これも言えるでしょう。實はこういう考え方の順序は循環しているというのが、ほんとうでしょう。

こうして生れた時代意識が「末代」という意識であり、「時下れり」という意識であり、一般に濁世とか末法とかいわれている意識です。いつ頃からこういう意識が強くなつたかという詮索はいま必要でないので、致しませんが、こうして出来上つた歴史觀によりますと、釋尊以後の歴史は、正法・像法・末法の三時を經過する。正法は釋尊の入滅後五百年、像法はその後一千年、末法は一萬年である。末法一萬年まではともかくも佛法が残るが、一萬年を過ぎれば、いよいよ法滅となるのである、というのです。これに教・行・證を配當して、正法はこの三益が共に存する時代、像法は教と行とあつて證のない時代、末法は教だけが残つて行する者も證する者もない時代であると説いた人もあ

ります。この正像末三時の見方に對して、大集經月藏分の説のような五堅固説というのがあつて、釋尊入滅後を五百年づつ五分して、解脫堅固・禪定堅固・多聞堅固・造寺堅固・鬪諍堅固という表現で、それぞれの時代の特色を表わしました。堅固というのは、可能であるとか保證されているとかいう意味で、滅後、最初の五百年は解脫が出来る、その次の五百年は解脫は出来ないが、禪定は出来る、行だけあつて證はない、その次は實踐はなくなつて議論ばかりの時代、その次は造寺造像ばかりになつて形式的な伽藍佛敎の時代、最後にはその議論や伽藍もなくなつて、専ら鬪争の時代になる、というのです。皮肉にも歴史は事實こうなつていたのであります。

宗教的な見方と科學的な見方

こういう歴史觀について忘れてはならないことは、それが歴史を見る一つの立場であるとか、時代を考える考え方であるとか、いふような客觀的な生溫いことではなくて、それよりほかに生き方のなかつた主體的現實であるということでもあります。釋尊を遠く離れて、世の中はもうどうにもこうにもならなくしている、人間は罪惡の塊りになつてい

嘆きであります。ですから、釋尊が入滅なさつた年から數えていつが末法の第一年には入るか、ということが現實の大問題でした。その頃の年代紀の數え方からいつて、一説に、後冷泉天皇の永承七年（皇紀一七一二年）が末法第一年に當るということだつたので、いよいよ末法の世が當來したと、人々は恐れ戰^{おそ}いたのです。

中世の宗教中心の歴史觀、時代意識はこのように教主を離れ遠ざかるほど、歴史は悪くなる、後退する、というのですが、これは佛教に限らず、恐らくはすべての宗教的な歴史觀の特色でありましょう。人間の歴史はただそれだけとしては、惡化の一途を辿るだけで、いつかは世の終りがくるといふ終末觀はどの宗教にもあることですし、やがて「世の立てかえ」があると信ずるのです。

これに比べて近代の、十九世紀以後の歴史の見方はどうでしょうか。これは一言でいえば、歴史は段々よい方へ向つてゐる、歴史は發展し進歩する、と考える點で特色を持つてゐます。「種の起源」を書いたダーウィンは、最高度に組織されている現存の動植物も、長い歴史を経て、下等生物から進化したものであり、歴史的所産であるという進化論を創唱しました。この思想が世界に及ぼした影響は實に

壓倒的で、「十九世紀はダーウィンの世紀である」など言われたほどでした。生物學の方面からばかりではなく、哲學や經濟學の方面から、歴史は發展するという樂觀的な見方が相續いて現れてゐます。ヘーゲルの辯證法的な歴史觀は、歴史全體が一大理想の絶え間なき實現である、と考えてゐます。またこれに深い影響を受けたマルクスが同じく發展的な見方で、經濟史的に歴史を見たことは、誰でも知つてゐる通りです。科學的な歴史觀は一般に明るいのです。

このように宗教的な歴史の見方が暗らく悲觀的で、科學的な見方が明るく樂觀的なのは何故でしょうか。それにはいろいろの理由がありますが、まず第一は宗教と科學との性質が根本的に違うからです。宗教や道德はその人の一人の人格で完成されますが、科學は一人の力によつては完成せられず、多くの人の協力によつて、次第に完成されてゆくものであるからです。釋尊の後に釋尊なく、法然の後に法然なし。ソクラテスの後にはソクラテスなく孔子の後は孔子なし。しかるにニュートンの物理學はアインシュタインによつて補足され訂正され、そのアインシュタインの相對性原理も突如として天來の啓示によつて悟つたのでは

なく、その前には幾つもの捨石がありました。そしてその原理が初めて發表された時には、僅か十五、六頁の極めて示唆的なものであつたといふことで、それを立派な原理に仕上げたのは、後の多くの人の國際的な協力であります。湯川博士の中間子論なども多くの素粒子論者の活動によつて、發展しつつあるので、一たいどこまで發展するかかわらない位、その將來は多幸ではありませんか。

歴史についての宗教的な見方と科學的な見方とが違ふもう一つの理由としては、宗教は人間の内面性を追求し、科學は人間の依つて立つ地盤を對象とするという異りが擧げられます。宗教は常に人間性、人格性にかかわること、人間のあり方に對する酷しい批判であり、煩惱熾盛、罪惡深重としての自己を、意識することあります。ですから歴史を見、人間を見るのには、何か超歴史的なもの、根源歴史的なもの、超人間的なもの、超現世的なものを目安にしているといえましょう。この歴史や人間を超えたものが歴史の上にいつかは現われてこなければならぬ、この現れるときが救いである。如來の來迎がそれであり、彌勒の出世を待ちわびる心持はその救いへの待望であるのであります。宗教的な歴史觀は憂鬱で非觀的であるけれども、決して絶望的ではないのです。罪惡生死の凡夫であり、五獨惡世であり末世であるからこそ、如來がお救い下さるのであります。それは歴史を飛躍的に完成しようとするので

す。つねに絶對のもの、眞實なもの、人間以上のものを待望している大へん希望のある歴史觀です。これに比べると、科學的な見方は、人間の依つて立つ地盤、すなわち自然とか物とか經濟とかだけをしか見ませんから、それは發展し進歩しているようで、一應明るく楽しそうに見えますけれども、罪惡化の一路を辿つているので、世界は次第に地獄の様相を深めていくのであります。原子物理學はいかにも發展していますが、それに並行して原子兵器はますます發達してゆきます。兵器とか戦争とか軍備とかいう概念も、昔とはまるで違つて、人類皆殺しを意味するのですから、全く身の毛もよだつ思ひです。ある論議に末法の世になると、「生ずる所の草木の類も、手に執れば刀劍となる。是を以て互に殺害をなす」とありますが、全くその通りではありませんか。科學的な歴史觀は、もしそれだけで、人間そのものへの批判が忘れられるならば、人類を壊滅させるのであります。

こういう事情でありましたから、第一次世界大戰以後、ヨーロッパでは人間の反省、人間の探究が漸く著しくなつて、科學的な歴史觀と並行して、人間的實存の追及が盛になつたのです。それが實存主義であります。これは淨土教の立場といろいろの點で似通つた所がありますが、後に述べる機會がありますから、今は省略します。

隨筆 長壽法と放屁

石橋 誠道

去年の暮に編輯子から「何か一文書いて頂きたい」と言うてこられたが、丁度その頃は私の處で加行が始まる前であつたし、その他色々の要務があつてとても筆を執る暇がなかつたので、「いつか又何か書きましよう、今は暫くひまがないから」と斷つておいたが、然しなんだか借金をしているように思い乍ら今日までだんだん過して來た。所が京都の大本山妙心寺から發行される花園という小冊子を人から借りて讀んだ所、その中に山田無文老師が書かれた坐禪和讃講話という一文がある。その中に

人間長生しようと思つたら、少し抜けた所がないといかん、阿房げた所がないといかん、つまりユーモアがないとあかん。何時も師走の大晦日みたい、に、そわそわ走りまわつていてどないにしない。

徳川家康が百八迄生きられたという天海大僧正に、長命の秘訣を尋ねたそうです。すると僧正が、少食粗食、日湯陀羅尼、時々御下風遊ばさるべし。まるで阿房陀羅經みたいな事を申されたそうです。云云とて仲々面白く説明がしてあつた。特に御下風の説明が振つてゐる。一寸拜借して轉載する

最後は時々御下風遊ばさるべし。これが面白いです。御下風は下の方へ風を出すことで、おならをすることです。上品ぶらずに遠慮なしにおならを出しなさいというので、將軍様が遠慮なしにおならをすれば、上のなす所下之を見習うて、おならが世間にハランする。痛快ではありませんか、人間こう徹底したら長生出來ます。沈香もたかず屁もこかずと言うようなのは最も禁物。

尤も醫學上から言つても、體内に瓦斯を貯めておくことはよく

ありませんから、須らく發散すべしであります。精神的な瓦斯を頭の隅にためておくのは猶いけません。自分の缺點を人前にさらけ出すこと、つまりおならをしてしまうことは、仲々きまりの悪いものですが、そう言う事に頓着しない神経の太さが長命の極秘でありましょう。下略。

ある時諸大名の臣下達が一室に集つた事がある、その中に藤田東湖がいた。折柄腹中に催して來た。東湖は構わず、大音一發ブウとやつた。多くの者が聲をあげて笑つた。東湖は平然として「屁をした位を氣にするようでは何んが出来るものか」と言つたという話もある。

増上寺の法主故大島上人は、正式の時はいざ知らず、常平生はチンヤと坐わられた事は少なかつた。いつも横つくばい、たまには足を投げだして机にもたれて居らるゝ事が多かつた。そうして吾々と話をしながら眞面目な顔で屁をブウブウとしておられた。勿論自分にも何とも思われない。吾々も始めはおかしかつたが、後には何ともなくなつた。それでも何となく氣高い所があり、何とも言われぬ上品な所があつて、誰れ人よりも常に尊く感ぜられた。固より大島上人は大人であつた。小さな事には何の貪著もない唯だそれからそれと手を廣げて行く事にかゝつていられた。當時吾々が考えると危いような、恐ろしいような心地がした。いつも私は生涯の間にその結末がつくかしら、恐らくは途中で終りを告げらるゝであらうなどと思つていたが、その通りに其業半ばで

終られた。然し乍ら始めの企畫が大なればいつかはそれが完成する。支那の文章軌範に作文法として、始めは膽の大なるを要す、終りは心小なるを要すとあるが、大島上人の行き方もまずこの行き方と言つてもよからう。今京都の家政學園は大島上人一人の手で一代の間に築きあげられたものであるが、誰れしもあれを見て驚かないものはあるまい。屁を放ち乍ら考えた大きな考えの成功である。然しこれもいかに女子を善導しようか、宗教的に善化しようという眞實が籠つていたからである。

行雲流水、天地は私達に自然の尊さを教えている。雲は風に從つて西に東に飛んでゆく。水は常に低きに流れて移りかわつて腐らない。思うこと言わざれば腹ふくるゝ心地す。言うまいと思えど今日の暑さかな。心の腦みはすつかり親友に話すがよい。丁度おならをしたあとの心持のよいのと同じことで、心の底から清々とする。話されぬ事は神佛の前ですつかり懺悔して悔い改め、今後再びその失敗を繰り返さぬように誓うがよい。これが即ち長生の法であり、事業進展の道である。楽しい生活の常道である。すべて人生は常道が大切である。寒い時には着物を着る。腹が空つたら飯を食う。所が寒い時に着物を着ずに辛棒するから風をひく。甘い物があると食いすぎるから腹を下す。それが色々こちくれて、遂には一命を失う原因となる。何事によらず常道を守るといふことが、危険なく、失敗なく、天命を全うし、長生を得る秘訣であらう。

童心と宗教



— 談 對 —

佐	北	竹
藤	條	中
良	淨	淨
智	善	信

どうでしょうか、

竹中 これはどうもちとむづかしい。……

早速ですが、寺院と幼稚園の關係は仲々根深いものがあるようですが、佐藤先生の所のそもそもの動機はいかがですか。

佐藤 私のところは、父が創めたのですが、一つには法然上人の七百年御遠忌に何か一つやりたいという事と、もう一つは、ちようど現在、戦後の混亂に似た關東大震災

後の亂れた世情の中に投げ出されていた童心を何とかして清らかにのび／＼させてやりたいという父の氣持が直接の出發になつたんですね。

竹中 その當時、幼稚園は少なかつたでしょう。

佐藤 官(公)立の少數を除いては皆無だつたでしょうね。父は震災の時、江東の砂町方面に連日出かけては幾萬という罹災犠死者の靈を葬うのを日課としていましたが、それと同時に遺された何十萬の兒達を見て切

園長としての實際面の裏付けと、東京高等保育學校に宗教學を講議される竹中信常先生である。(龍海)

子供とお寺

編輯子 本夕は各先生それ／＼の立場から、

幼児と宗教心のお話しを承わりたいのですが、竹中先生一つ司會を……

竹中 司會者は司會だけで、お喋りはしなくてもいいんだね。(笑聲)

編輯子 且つ司會し、且つ語るということで

新しい寺の行き方——本號はその第二輯として、近頃頓に停滯の佛教界をふつきつて登場してきた「幼稚園と寺院」を題材として、「幼児と宗教心」の問題を取りあげてみた。語る人は。三十年に垂んとする経験と、大正大學教授として佛教の源流を學究され、且つは全國幼稚園協會の名常務理事として全國に活躍されている明照幼稚園長佐藤良智先生、焼土の中より苦心の開園を敢行された北條淨善みなと幼稚園長、及び宗教心理學を専攻し、自身も隆崇幼稚園の

實に考えたのです。幸い近くに今の御茶の水大學保育科の前身の保姆傳習所があつてこの附屬として出發したんです。その保姆さんはむしろクリスチャンが多いので、私の方も佛教主義の旗幟^{はたけ}を掲げ、佛教保育で今日まで來たわけです。

竹中 全體としてみると現在の幼稚園特に私立幼稚園は、本來行われていた寺院の日曜學校、子供會という長い間の基盤の上に今日の盛況を見ているんじゃないですかね。

佐藤 それは云えますね。私の近所に最近福壽幼稚園が出來たんですが、ここの布施師は、何十年とそういった幼児教化をやつてこられ、そのため近隣の支援も厚く、その基盤の上に幼稚園が生れたわけです。

竹中 寺院そのものとか、佛教自體とかと幼児との本質的關係は。

佐藤 おてらは境内も廣く、昔から遊びに行き、本堂の階段まで土足で上つておこられながらも氣のおけない愛される場所なんです。ね。

北條 そうく、うちなど地藏様があるが、いつのまにやら子育地藏様と名づけられて

子供達の心のふるさとのようになつちやいましたよ。

佐藤 寺小屋以來ですね。いたずらを、叱られても、何かしら心に受けもつていくような……。

編輯子 同じような境内も環境もありながらお宮にはどうしてつかないんでしょう。

佐藤 お宮は尊嚴を持し、不淨を忌むといった面が多い、いわば、閉せられたる場所、寺は開かれたるものと云えるかな。

竹中 つまり庶民性大衆性を持つてゐるわけだ。ところで、佛教は「生きた人を相手にせよ」という事がしきりと云われるが。

佐藤 佛教の正しい行き方として、皆の佛としての素質——佛性——を育てる最も初めの段階として、幼児教育というものは根本的なものとも云えるね。ジャータカ(佛の前生の物語)など本來は兒童むきの經典ともいえるし、そこに佛教と幼児との本質的關係が窺えるでしょう。

焼土に子供の樂園を

竹中 北條先生の開園の時の、お話しをどう

か。

北條 私は終戦前年にある寺へ入つたのです。當時は幼稚園も閉鎖令が下り、學徒動員の時です。終戦時私は軍籍にあつて司令部付でしたが、いよいよ日本は出直したと考えた。そして召集解除で歸坊すると一面の焼土、何一つない。近所の事も、檀信徒の事もわからず手の下しようもなく忙然と立つていたとき、ふと思つた。禍を轉じて福と爲そう、こゝで幼稚園を、たとえ青空の下でもよい、自らも生き佛恩にも生きるのだ——と。恰も直後の増上寺の聖書(住職になる前の修行)で北川教全尼師から幼稚園の話聞き、聖書中も、禮拜念佛食事の間、こればかり考えつづけた。

竹中 たいへんな聖書ですね。(笑聲)

北條 うん、行が終つて寺に歸るや第一聲、幼稚園を作るぞと、ね。(笑聲)家内も驚いたね。直ぐ行動だ。一月一日を期してね。しかし、いくらなんでも、この寒天では青空幼稚園はちと寒かろう。(笑聲)一應四月からという事で町内の人に集つてもらつた。しかし大勢は反對、でも一部の賛成を

手懸りに、檀信徒の同意も得て着手した。皆から云われた——ふところ手じやだめだと。

それから猛然と説明と懇願に廻つた。初対面の家でも、どん／＼奥へ通つて趣旨を主人に告げる。中には文句を云う人もあつたが、坊さんは柵經でもどん／＼奥へ案内なしに通るものと辯解してくれる人もいた。一月十八日からはじめ二月中に募金完了の豫定だつた。いやと云われぬ限り九回も行つた家もある。朝早く主人が出かけるというから、五時に起きて訪ねる、いない。夜遅く歸るといふ。十時に行く、歸らぬと云う。又行く。先方の奥さんの方で氣の毒がつて、明日話しくから來いと云つてくれて、とう／＼あの當時の金で三千圓出してくれた。そんな事で三十萬圓集つた。その間下駄は三足割れ、改良服は裾がすりきれもした。しかしだね。祖師のその昔、一寺を建立なされた苦心がしみじみ分つた。こゝだと勇氣りん／＼、どんな迫害でも信念の下に必ずやれる。中山鹿之助じやないが憂き事の此の方もつもれかしという

感で一杯だつた。

佐藤 そう云えば、焼跡に先生は美事な玉葱を作られたが、いつまでも玉葱ばかり作つていてはだめだと云つておられたね。

北條 そうでしたかね。

編輯子 こんどは可愛い園児の玉葱というわけになりましたね。

北條 とにかく、金があつての事なら樂だがそれは一般寺院では不可能だ。菩提心ある所全て成るという事の活きた體驗を味い得た喜びですね。加うるに創意と工夫と努力です。當時貴重なのは勢力でしてね、私も毎日出て、軍服一つで、土を盛り、木を製材所へリヤカーで運んだりやりました。

竹中 その場合、ことを成すに當つての寺族直接には奥さんなどの協力は、どうですか
北條 絶對だね。

佐藤 同感だ、うちのなぞ、それで身體をこわしたようなものです。

北條 今の話でおわかりのように、私は口下手で無鐵砲だから、あとの尻拭ひは、皆家内です、一寸の寄りでも、なけなしの財政から接待もやりくりしてくれるしね。

愛情・宗教・幼兒

竹中 北條先生の所では保育所と幼稚園との二本立時代があつたようですね。

北條 始めは寺は勤勞者の子を預る保育所という建前でしたが、財的に難かしいのと、幼稚園と二本立で坪数が足りぬので保育所はよしたのです。地方では保育所は公の補助も考慮に入れるとやりいゝ、都市では幼稚園という事が無理のない行き方でしよう。

保育所では家庭の恵まれない子が多い、彼等に本當の愛情をそゝいでやりたいと思いますね。芝浦の勞働者の子が一人いました。而も四年保育でした。朝七時から預つてやりました。それから親は稼ぎに出かけていく。その子の衣服はぼろ／＼で、ほかの父兄から、あんなきたない子は止めさせてくれと苦情が出しました。しかし愛情を注いで成育をみつめておりました。その上、うちの園にいる丸岡先生というのが、特に貧しい子や低能、汚い兒を面倒をみて献身的に私の氣持を代行してくれました。

學藝會の晴着がないと云うと、自分の少さい時の晴着を縫いなおしてやつたり、夕方つかれて滑臺で寝込んでいると、職員室にかゝえこんで自分のオーバーを着せてやるなどして夜六時頃まで世話していました。所が、三年半の間に見違える程よくなり、今では小學校で、こちらを見かけると明朗な顔を輝やかせて挨拶します。よかつたと思います。

竹中 全く愛ですね。教育基本法第八條には「宗教的情操は教育上、これをして尊重せねばならぬ」旨が明らかにされています。

學問的に云つても、人格完成には不可缺です。マ方針によるキリスト教政策上から宗教特殊教育は禁止されてはいますが、之は正道ではない。私の所でも浄土に童話を書いた事のある寺田先生など、自分が寶仙大學で高楠先生から受けた宗教的愛情を實によく生かしてやつておられます。

北條 そう、愛情も宗教心を持つ人からのものが本當だね。

佐藤 これが根本だ。食事の前の合掌とか、登退園に佛様に禮をするとかは所謂宗教行

事として、其から派生するに過ぎないとも云える。

人格は四才の宗教教育に

竹中 はつきりしておきたいのは、人間は四歳で宗教的印象を受容れ、従つて人格の構成は四歳にして基礎が出来るという事です。

佐藤 六歳という説もあるが。

竹中 日本的に數え年で行くと六歳ですね。

これが成人して、大きな故障にぶつつかると、この四歳當時の宗教的印象がよみがえつて平常の道に行ける。ところが、その當時そう云つた教育に無關心だつたものは、それが異常な方向を辿り犯罪とか粗暴に流れる。四歳教育がいかに人生の決定點であるかは、よく認識してもらいたいところです。

ところで今教育といつたが、嚴密には、教育というのは小學校以上のことで、つまり知識の注入というか、流し入れるといった意味だが、幼稚園では保育で、ことさらに教育と、保育と言葉を変えているのも、保

育が教育とは逆に人の本性を抜き出し伸し育てる——と云うべきでしょう。

佐藤 つまり、佛性ですね。

竹中 え、これを柔らかく包み育くむ。之が宗教的なので、たゞお經を覺えるとか、佛様を拜むとか——それも無論必要ですが——そのみではないんです。この根本的なはぐくみ育てられたものが、人生の危機に際していつかは出てくる。

佐藤 例を上げましょう、一つは五大で礦物學をやつたわたしのところの卒業生。

竹中 カチーだね。(笑聲)

佐藤 それが來て云うには、僕の友人はみんな唯物論へ行くが私には何かそれ以上のものが人生にはあるように思えると言うんですね。それというのが、何十年前、先代の園長先生、つまり私の父から佛様に手を合せて拜まされたことが頭を去來するのですね。それで私には自分の抱いている氣持を理論づけてほしいというのだ。私は佛教の理論や、西田哲學を併せ説いて話してやつています。

もう一つは、東大を出て、○製紙會社の

いゝ地位に行つた子で、病を得て、いろいろ悩んだ。キリスト教も考えたが、幼稚園時代の佛の教が何かしら忘れられないと云つて尋ねて來ます。

この二つの例は十年以上たつての話ですが、現在でも園児達の親は、もつと園で宗教の話をしてくれと云つて來ます。各家庭で最も宗教心のあるのは園児で、食事に合掌、佛前に拜禮している。つまり、この園児を媒介として各家庭が宗教心を高めるといふ結果も出ています。

竹中 今の話で、何十年かたつて宗教心がよ

びおこされて園へ訪れても既にそれが見知らぬものとなつていない。時代がかわろうとも同じ寺、同じ住職又はその子弟がその園を繼承しているという事は寺院の強味ですね。教會とか神社ではそうはいかない。

何といつても、歴史性とまで行かずとも、同じ雰圍氣を持続することは大切ですね。

北條 とにかく宗教と教育は不可分ですね。

竹中 本質的には、凡ゆる文化の根源は宗教にあつたので、その意味で、教育も無論宗教、日本では佛教がこれを受け持つていた

ことは、明らかなことで、ヨーロッパでもベスタロッチ、フレーベルなど幼稚園や宗教々育にとつて忘れる事の出来ない教育家もすべて教育者である前に宗教家であつた。

佐藤 池田潔の「自由と規律」を讀んでも、キリスト教の衰退が、教育に切りかえられて、勢いを盛りかえしたとあるし、オクスフォード・ケムブリッジ等すべて教會から出發している。佛教も勿論そうだ。現在の大學など、佛教の大學林から出て來ていべきだ。

竹中 そこで、「これからの寺院の行き方」だが、教育と宗教との不可分なことは皆さんのお話でも既に明らかなところで、檀家と寺との關係も、たゞ法事、葬式のみでなくお寺へ行けば何とか解決して貰えるといつた、教育的な面を、更に一層伸ばすべきでしょう。それには、我々もまづ第一に勉強すると同時に、どんなことを持ちかけられても、事に應じ、機に變ずる丈けの體驗と信念を持つべきだ。

北條 教える者自身の信念だね。

竹中 まさしくその通り。宗教家が教育者であることは當然だが、私のいいたいことは教育者にして、正しい信念を持つことです。教育がただものを教える丈けでなく、自分を全部傾注することだとすれば、その傾注すべき自分がフラフラでは、これは教育でも何でも無い、知識の切り賣りです。

それからもう一つ。今のお寺で、幼稚園丈けが生きる道じやない。たゞ、何かしなけりやならない。それぢや幼稚園でもやろうか。そう云つた程度なら寧ろやめた方がよい。經濟的にプラスしようとするならまだ外にする事はいくらでもある。伽藍の地所を利用する丈けなら、これもまたいくらでもその方法があると思う。授産所住宅問題の解決、老人ホーム、孤兒院等々やらねばならぬことはいくらでもある。幼稚園のみ執着することは僕のとらないところだ。

編輯者 おやおや。大部方向がそれかけて來ましたね。だがとに角、さしづめお寺と幼児教育の不可分性というところを、先生方に明かにして頂いたところで、今日の話しはおしまいに致しましょう。色々ありがとうございました。



現代に再現された臨終行儀式

——森本氏夫妻の盛儀に列して——

淨土教では如來の來迎^{らいよう}とか臨終の行儀とかいうことが、たいへん重要な意味を持つてゐるにも拘らず、今では殆んど昔語りになつていて、そういう行儀式がどんな作法でどんなことを行ふのか、見たことのある人も知つてゐる人も少くなつてゐる。昔はこういう儀式は誠に華やかに行われたもので、來迎講など是一種の季節的な楽しい行事として大がかりに行われたのである。

それが現代に再現せられて去る十一月二十一日、横濱市鶴見區矢向町良忠寺で近頃稀に見る多數の大家の參列のもとに、嚴かに行われた。良忠寺は淨土宗元祖記主良忠上人の開創した古刹で、上人の遺法であると伝える虫封^{むすぶ}で名高い寺である。封ぜられる虫は必ずしも子供の虫だけには限らない。大人の腹の中に集食^{しゅうしょく}う精神的な虫も、社會を害する社會

悪という毒虫も、みな封ぜられなければならない虫である。現住職森本祐顯師は明治三十九年に荒廢その極に達していたこの寺に、第五十七代の住職として就任して以來、五十年間に涉つて、一方では社會を毒する惡虫の除去につとめるとともに、また一方では寺門の興隆に心魂を傾注してきた。

その功績は甚だ多大である。元來が企畫性に富む人であつて、その企畫がまた一般常識人の意表に出るものが多い。大正末年に本堂の修理、庫裡の新築を完了したときには、落慶記念に千反^{せんはん}名號^{なごう}を文字通りに走り書きして道俗をあつといわせた。疊^{たたみ}一疊ほどの硯で庭箒ほどの筆にたつぷり墨汁を含ませて、千反の白木綿が總門から本堂前まで、繰り攢^{くわ}げられた上を、南無阿彌陀佛の一字一劃を、筆を擔いで馳せ走り書いたのである。

戰爭で梵鐘が供出されて、主の居ない鐘樓だけが残つていたのを、梵鐘再鑄を發願して彌陀の四十八願に因んで四十八日間に、百萬圓の寄附金豫約を完了したことは、名高い話になつてゐるが、法のための事業となると、全く興奮するのがこの人のつねで、四十八日間ほとんど毎夜二三時間しか眠らなかつたそうである。そして今、新たに修築された鐘樓に、大梵鐘がその大きな姿を吊してゐる。吉田首相が揮毫した「正覺大音響流十方」の文字が浮き彫りされてゐる。

師には祐堂君と祐玄君との二人の令息がある。戰爭が激しくなると二人とも召集されて遠く戦線に送られた。終戦とともに、幸にも祐堂君は無事に歸還されたが、弟の祐玄君は消息がなかつた。満州で戦死したともソ連に

抑留されていても、いろいろに辱されていた。しかし悲痛極らないことには、去る十一月初旬、戦死が確認されて、その公報が通達された。かねて覺悟していたことではあつたが、森本一家の悲傷は新にせられ、痛惜の思いは深かつた。出征の日の、日の丸の旗に埋められて元氣に出征してゆく祐玄君の姿を思い出しては、新たな涙に頬を濡らしたことがある。師の胸の中にはこういう考えが浮んだ——自分もすでに七十の坂を四つも越した、

祐玄君の戦死も確認された上は、表葬を営んで菩提を弔らい、自分は隠退し法嗣の祐堂君に寺門經營の一切を引き繼いでもらおう——これはかねて今日の日を豫期して、考えていたことではあるが、公報を受け取つて、いよいよその決意を固くしたのである。隠退は隠居ではない、再生であり再出發である。今までの行きがかりやわずらいを悉く振りすて、生れたばかりの赤子と同じように裸かではだ、で、人生の再出發をして、佛法のために、世の中のために働くことができたなら、どのようによに喜ばしいであろう。一度死ななければならぬ、死んで再び生れなければならない。如來のみ手に迎え取られて、極樂に生れて、もう一度この世に還來して、人のために働か

なければならぬ。臨終行儀式、死んで生きるための儀式、その日を公報を受けた日から十八日間のうちに決行しようと思つたのである。十八日間のうちに——それはいうまでもなく、阿彌陀佛の第十八願（念佛往生の願）の十八という數に因んだのである。そして午前中、祐玄君の表葬を盛大に営み、續いて午後には臨終行儀式を行うことになつて、急速に準備を進めた。

その日の道場の有様はどうであつたか。本堂の入口に、本尊阿彌陀佛と向い合せて、釋迦牟尼佛の畫像が掛けられ、そのあたりから本尊のみ手まで、五彩の糸が張り渡される。五彩の糸は五色の雲の象徴である。釋迦牟尼佛の畫像の兩側には、「究竟大乘淨土門、諸行往生稱名勝、我獨萬行選佛名、往生淨土見尊体」という偈の軸が二幅ずつに分けて、掛けられる。書は故大谷玄旭綠雲の筆である。畫像の前に大導師の座が設けられ、そこから本尊の前まで、白い木綿が敷かれる。兩側は火の河と水の河である。白木綿は二つの河に挟まれた一筋の白い道である。いわゆる二河白道である。導師席の前、白道の兩側に本尊に面して今日の往生人である善男子、善女人の

半疊座が設けられている。

この日の行儀式の差定（式の次第）は、古式を參考にして新解釋を加え、大導師渡邊眞海僧正（宗務長）が新定されたもので、來迎講式と臨終講式を一つに繕めたようなものである。喚鐘、奏樂、大衆及び導師渡邊僧正が入堂すると、今日の善男子、善女人が入堂着座する。今日は正僧正森本祐顯上人とよ子夫人ではない。一介の往生人、祐顯殿とその妻とよ殿である。善男子は黒衣に木蘭衣を着し、善女人は白無垢に白の帶である。

疊の見える所がない位、びつしりとつまつた道俗大衆の唱和する香偈、三寶禮、四奉請、略懺悔、嘆佛偈と型の通りの順序で進むと、導師渡邊僧正は曲祿を立つて佛前に進み、恭しく表白を讀誦した。それが終ると日沒禮讃の唱和が始まる。堂を揺り動かすばかりの大衆の聲である。六時禮讃のうちでも日沒禮讃は詩偈が最も短いが、その急テンポのリズムと階調の繰り返えしが、追い立てるようで人生の黄昏を思わせる。「南無西方極樂世界無量光佛、願共衆生咸歸命、故我頂禮生彼國」——ただそれだけの同じ偈が佛名が變るだけで忙しく繰り返えされて、人をせき立てる。

禮讃が終つて阿彌陀經の轉讀に移る。大衆



の音聲がはずんで、「もし善男子、善女人ありて、阿彌陀佛を説くを聞いて、名號を執持すること、もしは一
日、もしくは二日、もしくは三日、もしくは四日、もしくは五日、もしくは六日、もしくは七日、一心不亂なれば、その人命終の時に臨んで、阿彌陀佛もろもろの聖衆とともに、現にその前に在します。」という一段にかゝる頃大導師は靜かに立つて善男子、善女人に起座を促した。そして二人を誘導して片手で五彩の糸を頼りとしながら、白道を踏んで佛前へ進んだ。善男子、善女人もこれに習つて五彩の糸に頼りながら、靜かに白道を踏んで歩んだ。釋迦牟尼佛は「速に行け」と發遣し、阿彌陀佛は「早く來たれ」と招喚する。「こゝに遣り、かしこに呼ぶ」。二人は燃えさか

る火の河と底知れぬ水の河との間に通ずる一筋の白道を精進して、ついに佛の懷に辿りついた。そしてそこに設けられた蓮華座に着いたのである。

讀經が終ると善導大師の發願文。その中の、「かの國に至り終つて六神通を得て、十方界に還りて苦の衆生を救攝せん」という一句が特に印象的に響いた。極樂往生は樂園に生れてあらゆる欲望を満たして、遊んでゐることではない。佛のみもとで嚴しい佛道修行をして、再びこの世に還來して、衆苦を救済することである。——それから、念佛行道、總回向、四弘誓願となつて、一時間半に渉る長い行儀式を終るのであるが、四弘誓願に移ると二人の往生人は再び立つて白道をもとの半疊座へと還つた。正しく還來穢國土人天であり新生活への誕生である。森本夫妻の挨拶の一句には次のような言葉があつた——私生涯の寺門興隆の事業も大体一段落をつけ、併せて法嗣祐玄の表葬も無事執行いたしましたので、私共夫妻としては何等思ひ残す事もありませんので、せめて今後は世俗を離れて餘生を佛道のため社會のために捧げたく、私共の人生の二期を劃するためこの式を行いました。(頁二三につづく)

Yちゃんのこと



須藤隆仙

Yちゃんは美貌な少年であつた。

いつも顔を心もち上に向けて、大股に美しい足を運んでいた。

Yちゃんが死んでから四月になる。

Yちゃんは小僧さんだつたから、お戒名は下に法子と云う字がつけられた。

お戒名の中に「義勇」という字もあつた。

死んだ直後、義勇なんて兵隊さんの戒名みた

いだなあ、と私が云う

と、「きつと勇氣があ

つたんでしよう」と義

母が呟いた。

何時だつたかYちゃ

んが

「僕の本當の母はネ」

と口を出した時、私は

「本當の母……。本當

の母と嘘の母とがあ

るのか」

と茶化した事があつた

Yちゃんは何も云わな

かつた。

雪の降る時など、Yちゃんは夜學だつたの

で眞白になつて歸えつてくる事が何度もあつ

た。

肩をすくめて、きまつた様に「はあッ」と輕

い息をはいて部屋に入つた。

時には雪で濡れた靴下をストーブの側に並

べて干かしたりなどしていた。

「學校は寒いだろう」

と私が云うと

「うん、丁度僕の側のガラス破れて、ネ、風

が來てとても寒いんだよ」

と素直に答えた。

「だがお前達はまだ樂だよ、僕等の時はな、

戦争中で、冬になると電車が動かないんだ

だから往復二里の道を毎日歩いたものだ

よ」

私は何時も、彼が現境を最も苦痛に考えては

いやしいかと思つて、こう云つたものだつ

た。

Yちゃんは孤獨な兒だつた。Yちゃんと義

母一人、このたつた二人丈が、かろうじて親

子と云う一團の存在だつた。

Yちゃんは幼ない時もらわれて來たのだ。

四ッだつたとか、六ッだつたとか聞いてゐる

義父にあたる人はお坊さんだつた。

お坊さんのお父さんは、ある大きなお寺に

勤め、毎日そのお寺に通つてゐた。

だが此の人はYちゃんが三年生の時死んで

しまつた。

Yちゃんの苦しみの生活は、義父が死ぬ前から續いてゐた。

それは此のお坊さんのお父さんが、三年も前から病氣だつたからである。

Yちゃんは決して、自分の過去に於ける苦しみなどを口に出す子ではなかつた。

いつも、唯だまつて、人から聞かれた事は簡単に要點丈を答えていた。

だからYちゃんに對して、何か深いものをもつてゐる人は、始終彼の言動にもの足らなかさを感じていたかも知れない。

彼の苦勞も私は彼の口から聞いた事は一度もなかつた。

彼が死んでから、彼の義父の親戚の人達によつて、Yちゃんの苦勞が痛く私達の肺腑の中に語られたものである。

Yちゃんはバスケットの選手だつた。

夏の夜など練習を終えて随分おそく歸る事が何度もあつた。

美しい少年の脚はスポーツに逞ましい力をもつていたのである。

だがYちゃんは心臓が弱かつた。

其れは生理的に如何なる原因だつたのか知らないが、此の事は最も彼を悩ます魔障となつていたらしい。

何時だつたか私が冗談に

「なあ、Y君、一生懸命體を丈夫にして、立派な大人になるのだよ」

と學校の先生口調を眞伺て肩をボンとたたいた時、

「わかつた、わかつた、面白くないなあッ」と大聲に呶鳴て、私の手を拂いのけた事があつた。

以來私は彼に對して、身體の事を絶対に云わない様に心がけた。

バスケットをやると云う事が、彼にとつて幸福だつたのか、不幸だつたのか私には解らない。

それはこうなのである。

ある時彼がバスケットの練習に行くと云い出した。その日は日曜日だつたのである。

その時彼と私との間に、次の如き話が交わされた。

「映畫へつれて行つてやろうか」

「うん、だけど今日午前中からバスケットの練習があるから、それが済んだら行くようにしてくれない」

「いゝよ、もし何なら、練習の終えた頃、學校迄行つて、學校から一諸に行く様にして

も良いじゃないか」

「うん、それでもいゝよ」

「あつ、だけどお前は運動の靴をぶらさげてゐるのだな、靴をぶらさげてぢや都合が悪

いだろう」

「いゝよ」

「いや、靴は學校の教員室にあづけておくよ」

「だつて、夜學の方の教員室は閉つてゐるだろうよ」

「生徒が鍵をもつてゐるんだよ、だから自由に開ける事が出来るの」

「そうか、それぢやそうしよう」

其れから間もなく、彼は例の靴をぶらさげて裏口ら出た。窓の方に顔をむけて、私の方に靴をぶらぶらさせた。

と、むこうの廊下で日曜學校の生徒が騒ぎ出した。掃除をし始めたのである。日曜日にはいつも子供が三四十人集まつて、佛様の前に

お勉強とお清掃との半日を過すのである。私は子供達に掃除の事を見てやるべく廊下の方へ急いだ。子供達は既に箒を持出してゐるもの、バケツを下げてゐるもの、庭先におりてゐるもの等、まちまちだつた。ふと庭先にゐる子の方に目をむけると、むこうの便所の中にYちゃんの足が見えた。小さな五尺ばかりの梯子を便所の中に立てかけ、その上にあがつて、上半身は何をしてゐるのか見えなかつた。奇妙に思つてしばらく眺めていると、とんと梯子の上からYちゃんが飛びおりた。颯爽として門を出て行くYちゃんの手に、もう運動靴はぶらぶらとしてゐなかつた。

便所の上に中二階の様に、色々な雑材を上げてゐる棚がある。運動靴は淋げに其の上に置き隠されていれのである。

何故にバスケットの練習に、と云わなければならなかつたのか、此の謎もとかずに彼は死んで行つたのである。

Yちゃんの死んだのは七月の暗い盛りだつた。

其の夜は星もなく、唯眞黒な空氣だが、妖

艶な黒猫の不氣味さを覺えさせた。

眞黒な夜の道を獨り歩むYちゃんを見たとき、云う友達が一人あつた。藥屋で眠り藥を買つてゐるYちゃんを見たとき、云う友達もあつた。

「どうしたんだい」

ときくと

「うん、一寸眠れないのでネ、藥を買つてゐるんだよ」

と云つてゐたそう。

若い命は、これを最後に友人に別れを告げて暗の中へ消えたのである。

——さて此處に、憂悶として胸をかきむしる事實はあつた。

其れは彼の遺書の中に、たどたどしい筆で、一枚起請文の一節が記るされてあつた事である。

古ぼけた文机の上に、原稿用紙にエンピツで書かれた遺書が四通重ねられていた。

一通は彼のお師僧さんにあてたもので、今迄お世話になつた事を深く謝して、冷たい禮の言葉がつづられてゐた。

一通は義母にあてたものである。「お母さ

んは自分から死ぬ様な事のない様、今後は世の人の爲に生きて下さい」と、あまりにもいじらしかつた。

次には玉子と云つて年上の女性にあてたものであつた。日頃から姉の様にしたつてゐた人だつた。

そして最後に私にあてたものがあつた。

「只往生極樂のためには南無阿彌陀佛とてうたがいなく往生するぞと思ううちにこも候也」——原文通り——

一段さげて末尾にこう記してあつた。

遺書は皆、服藥してから書いた爲、字も亂雑だし、誤字も多かつた。

「頭がギョツとして、目がかすんでゐる」とも記してゐる。だから一枚起請文の文句は違つてゐる。

私にはその様な經驗が無いから、わからないが、おそらく服毒して死の直前此れ丈の事を書いてゐると云うのは奇蹟ではなからうか

彼が死んでから人々は色々噂を飛ばした。

「中學一年生の頃から死ぬつて云つてたよ」

「周囲の者がいちめ殺したと云うではない

か」

「いや、彼は死んで幸福だったのだよ」

「もらわれて来たと言ふ事、それが第一の原因なんだ」

「矛盾だらけの寺院生活、全くしいたげられた小僧ぐらし、それが彼にはたえうる事の出来ないものだつたのだよ」

世間の噂はいずれも宙に流れた秋風だった。唯この様な世間虚假の中にも、彼が死んだと言ふ事實は尊い眞實だった。

ちやら、ちやら あまりにもあどけない遺骨は、S寺歴代止宿僧侶の墓に納められた。其の中には八年前に死んだ義父のお骨もあった。

又全く無關係のお坊さんのお骨もあった。身長五尺五寸、體重も相當あつたと云うのに其の割にお骨は少なかつた。

「まだ十九だそうだなア、どうして、どうして、骨の太くなるのはこれからと云う所じやも」

火葬場の火葬夫はそう云つて割箸で骨をなでまわした。

外容丈を見て、一人前と思つて頼り切られたある種の重みは、五尺五寸の子供にたえられぬ力だったのであろう。

して見れば無慙にも折れた彼の心骨には、少年期から青年期への悲哀が切々と語られていたのである。

齒は齒骨と云つて、別の小さな箱に納められた。いつも眞白な美しい齒を出して笑う子だった。其の齒も今は焼けあとの瀬戸かけの様になつてゐる。

短い波の人生は終つた。薄命の美少年は常人の様に蓄髪にボマードの香りもただよわせずに去つてしまつた。

誤謬ある一枚起請文の一節丈が、尊い彼の最後の生命となつたのである。

彼が死んでから、二匹の金魚と、一羽の鳩とが死んだ。

掌上にのる小さな生命が、五尺余の彼より長らえて死んだのも不思議ではない世の神秘なのであろうか。

若く美しい魂は西へ飛んだ事であらう。

「これ僕の戒名、おもしろいなあ」

と白い齒を見せてにつこりしながら。以上

保育ニュース

○淨保連一月東京例會は二十六日宗務長自坊で行われた。

○一月二十七日、東京西念寺みなと幼稚園で、港區近邊淨土宗幼稚園の新學期及びメンタルテスト等についての研究會が行はれた。

○淨土を、保育職員に宗教教育の資として園長がすゝめたいと一有力者の聲があつた。

○川口市稻岡學順師は保育園の外に、近々幼稚園新設の計畫をされている。

○保育ニュース大小不拘、編輯部宛お送り下さい。

—時事隨想—

「やくざ」の精神

—現代批判として—



高瀬 廣居

幡隨院長兵衛、切られ與三、三人吉三、次

郎長、忠治等、少年時代に講談本でおナジミ

深いこれ等ヤクザ英雄は、今では大衆の胸に、

水のほとりにたゞずむ旅鳥の姿や、伊達男姿

でカブキに浪曲に映畫に流行歌に乗つて悲し

く著しく生きる渡世の切なさを掻き立て、い

る。が然し

「してそこもとの御家名は」

「問はれて何の某と、名乗るような町人でも」

と、海老蔵と梅幸の名演技で演ぜられる「鈴

ヶ森」に拍手を送る觀客の涙は、そも何であ

らうか。

やくざの世界。仁義

が通用する特殊な集團

體がリーゼンとなりワ

ラジがラバソールと變

り、三度笠がミルキー

ハットとなりヤクザは

時代に脱皮していても

その組織も集團も、そ

してこの世界への群少

不良青少年の憧れも果

しくつきない。

競輪・競馬・マージャン・寶くじと賭博は

今の社會に多い。勝負の世界、生命をかけた

瞬間の緊張になげる賽の目。

私には賭博とヤクザの生活がどうやら私達

の日常に深く喰い入つてゐる様に想えてなら

ない。更に、彼等ヤクザの世界に存する、禪

家の僧にも似た嚴格なシキタリやオキテが、

日本人の心情にひたし寄り沿うて、無言の壓

力を加えている様に感ぜられて仕方がない。

去る十一月の初旬、仕事の必要で、ヤクザ

の親分衆に逢つた。六十歳前後の親分達は、

往昔のヤクザ稼業を様々に語つてくれ、今の

アプレヤクザの墮落を歎いていた。だが、私

は、この未知の世界に住む人々の生活信條が

餘りにも、今日の日本の集約的な表現であり

危機に置かれた日本の現實の課題を端的に示

している様に想えた。と同時に、私達の日常

生活に「ヤクザ」がいかに根強く一般化され

ているかに驚いた。

一例を示そう。

總理大臣の個人使節が渡米して密かに、米

政府と話をつけて來たり、戦力なき軍隊を作

る様なことは、肚腹と黒幕の政治の行われる

國では或はこう云つた事は當然の事かも知れ

ぬ。友情會談という個人の人情と義理で一切

がすむ政界は寧ろヤクザ精神を稱揚してゐるの

かも知れないし、國家が「貸元」となつてい

となむ、賭博——競輪・競馬・寶くじ——の

旺盛や、大臣首相側近が、内界賭博で（この

内界というのは一蓮托生という事で、鐵火賭

博に對する素人賭博を指す）一夜に數百萬を

かけてゐる今日の社會は、善良な市民が知ら

ぬ間にヤクザ社會となつてゐるのではなから

うか。

「ヤクザ精神は日本人すべてが持つべき國民

精神です」と向島のS親分は卓を敲いた。確かに儒教精神を讃仰し、日本列島という「島」を愛する偏狭な祖國愛はヤクザ精神と軌を一にしているし、親への絶対服従と長上への序をもつ心は正しい修身公民の教科であらう。垂直の原理に生きる忠と孝は、逆コース文教政策の道義昂揚の眼目であらうし、情誼と人情と義理によつて繩張りを守りぬく心は當今の保守政治家の呼號する愛國心や民族獨立に氣脈を通じるものかも知れぬ。血と地による統制と權力支配を無條件に受け入れる傳統的ヤクザ精神は決して封建的遺産としてのみではなく、帝國主義金融資本家の嬉ぶべきものとしてネオフワシズムの體裁を帯びて私達の生活にじわじわとしみこんでいていないだらうか。

勿論ヤクザの美點は多い。廻りくどい論理の遊戲や、持つて廻つた挨拶や街いなど一笑される。物質で物事の解決をはからない「心」の誠實を大切にする。これ等はヤクザのよい點だらう。しかし彼等はそれ等の事柄を個人の自我としてもつのではなく一定の集團の精神として組織構成の集底部としてもつのである。右翼との結合はこの點からも容易である。親分から一直線に天皇絶対主義に結ぶことはたやすい。

然し又、ヤクザの心根は大眾、庶民のもつ素直な感情でもある。長屋のおカミの威勢のよいキツプ。職人のもつ、「イキ」でいきる氣質。落語の熊公八公のもつ愚かさや氣持のよい單純さ。一日のラジオから「ヤクザ」は型をかえて流れ、映畫にカブキにナニワ節に、政治に「ヤクザ」は生きている。民主革命の途上に在つてすべてが反民主的にゆがめられている今日私は戒心をもつて「ヤクザ」の一般化を恐れる。そして私は彼等のもつ「戒律」に厳しさとストイックな生活精神が、僧侶の生活に無縁かと。

法然はその教團を統制する爲に起請文を書

き、道元はその僧堂に於て嚴守すべき法式を定め、それぞれ戒を相傳する。

日蓮は一切の他宗教を排他的に攻撃して法華の「シマ」を圓扇太鼓で呼號する。新興宗教はその點ヤクザと同一と云つてよからうし僧侶階級の無力と佛教界の低迷は、寧ろ「ヤクザ」の社會化にひしがれてあがく未法の姿と云えまいか。

~~~~~  
(頁一七ヨリ)

初めは芝居がかりであるとか形式的に過ぎるとかいう感じもしたが、いつのまにか宗教的儀式の持つ壓力が堂内を壓して、參列者一同に深い感銘を與えた。宗教は理論や計算ではなくして、象徴であり行動である。儀禮を通して眞實に觸れるより他に道はないのである。

あとで檀信徒の一人、法務政務次官三浦寅之助氏は、この日の感懷を記者にこう語つた「實にいい心境ですね。私はまだ宗教に入るといふところまでいけないけれども、一切の今までの行きがかりを捨て、全く何の私欲も持たずに、新生活を踏み出すというのは、羨しいです。私は今はまだできないけれども、そうなれたらいいなと思いますね。」(K記者)

譯意  
初夜禮讚

吉田定久譯

1、「救いませませ、恵みの阿彌陀」……以下省略

阿彌陀が慈悲の御ちかい、

み名をば聞きて願う者、

「我等願いて、安樂國に往かん」……以下省略

2、廣き世界に充ち満てる、

進みて退かぬ聖人も、

3、行のすぐれし聖人や、

其かず計り知れざるも、

4、あまた佛の國々の

勤事の衆は多けれど、

5、雲と見まごり聖人は、

上なき衣や香をもて、

6、奏でる音楽おごそかに、

底とてもなし涯もなし、  
皆いたるなり彼の國に

教に床しく徳を積み

阿彌陀の國に皆生る。

福の少なき者やなど、

阿彌陀の國に皆生る。

法にひたむく聖人や

阿彌陀の國に皆生る。

各々 匂う花々や、

阿彌陀に供え奉る。

響くこよなき和雅音は、

會員だより

南無阿彌陀佛 淨土は山椒の實か私の魂に  
ピリツとする箇所が必ずございます。毎號  
吉田先生の御文はしみじみと私の胸にこた  
えます。昨年は一板起請文のお講義有がた  
く拜見させて頂きました。又お正月から小  
消息も此上なきよいお話と次を楽しみ、お  
待致して居ます。私事近年寒い間は床の中  
で過さねばならぬ體となり、お寺詣りも思  
ふに任せません。勿體ないが寝ながら淨土  
をくり返し、拜見させて頂き居なが  
ら所在なく寝ながらお説教の中に列して  
心地致し、實に有がたい事でございます。  
古い淨土は幾十回となく拜見、むづかしけ  
れば尙樂しんでくり返し拜見する内、頭で  
理解出来ずとも體に有かたさを感じます。  
之も諸先生方のおかげと厚く御禮申上ます  
お十念、合掌。

佐賀縣北多久町多久原

於保 郁

- 勝れし尊をたゝえてぞ、  
 7、慧日あまねく世を照し、  
 三たびめぐりて人々は、  
 8、かざり極めし彼の淨土、  
 無上の心おこしては、  
 9、時に畏こし、無量尊、  
 恵みに満てる言の葉は、  
 10、御身の光り回りきて、  
 一切 仕うる人々の、  
 11、み聲震えてくまもなく、  
 つど正士の願をば、  
 12、かざる淨土に至るとき、  
 必ず阿彌陀の導きは、  
 13、多き佛につかえんと、  
 障りなきをば喜びて、  
 14、若し人善の本なくば、  
 僞慢 弊 怠けては、  
 15、宿世に佛を仰ぎ見て、  
 聞きて唱えて敬いて、  
 16、其わざ薫る御名をきく、  
 十念はもとより一念も、  
 17、世界に満つる火なりとも、  
 聞きては喜びたゝえなば、
- 阿彌陀に供え奉る。  
 生死の雲をはらうなり、  
 阿彌陀を敬い奉る。  
 巧みさ言はん方もなし、  
 わが住む國もかくこそと。  
 花の顔 笑み玉い、  
 あまねき國の光なり。  
 つむりに高く輝けば、  
 皆喜びや限りなし。  
 わたる響きぞ尊とけれ、  
 われ皆知ると宣まえり。  
 神通 速くも身につきて、  
 高きさとりを得せしめん。  
 諸刹をたずねて敬うに、  
 またや安養國に還るなり。  
 阿彌陀の御名は聞き得まじ  
 御教信すること難し。  
 いま此事をよく信ず、  
 こゝろ喜び身は躍る。  
 喜び唱え勵みなば、  
 阿彌陀の國に皆生る。  
 分けてぞ直ぐに御名を聞け、  
 阿彌陀の國に皆生る。

あけまして御目出たう御座います  
 御社の皆様毎月〳〵御苦勞様で御座います  
 私は昭和二十四年六月號よりずつと御誌を  
 拜見致して居ます。そして、全部しまつて  
 居て時々くり返して拜見致して居ます。誠  
 に有難い事で御座います。十二月號も御送  
 り下され有がたう御座いました。

・桑原 千代

拜復、先便お葉書にて、淨土其の他、二、  
 三を御送附下される御通知に接し、心待ち  
 にして居りましたが、本日(十九日)合掌  
 裡に、落手致しました。意外の贈物に、會  
 員一同、喜びの嘆聲に賑つて居ります。又  
 本日は、丁度、築地本願寺より、篠田龍雄  
 先生が、御來清下され、初對面乍ら、信仰  
 につながら、誼みで、親くお教を頂きました。  
 重ね〴〵の佛の慈光に、本日は誠に佳  
 き一日となりました。

18、三寶ほうばん末の世に、

開きて唱えば一念も、

19、佛の御世に値い難く、

希に尊とき御教を、

20、自ら信じまた人を、

大悲を普く傳えてぞ

○以下日沒禮讃參照

21、世の人の、知るべきは、

仇なやみ 底とてもなし、

術ありや その苦を度る、

ふるいたて眠を拂い、

百年きこゆる此法を、

阿彌陀の國に皆生る。

人は信じんおき難し、

聞くはこれ亦難きなり。

信ぜしむるもいや難し、

げに御佛に報ゆなり。

初夜に入る、 偶ぞ、

浮き沈み 邊とてもなし、

樂しきや この現世は、

こゝろして禪を願え。

○

是では却て導師の御意志に反すると思ひますが難解な原文に少しでも民衆を引寄せたいとも考へて敢てこの罪を犯した譯であります。元より私の淺學では文中に多くの不滿がありましよう。どうぞ諸大徳におかれましてお氣付の點は御同情を以て御教導下さる様お願い申します。

(北海道上磯郡知内村大乘寺内)

月二回の集會には、佛教聖典と歎異鈔の講義を行つて居りますが、未熟のため、なか／＼所期の目的を達する事が、出来ません。この外、月一回「ダンマ」と云う機關誌を發行し、各員の信仰感想談等を輯録して居ります。(略)

東京都北多摩郡清瀬病院八  
佛教研究會

船津 定祐

新年號の奥野先生のは、短い中にも強いものを受けました。

東京、T生

### 新維持會員芳名

山田 鏡 瑞(東京)  
大竹 靜 子(仙臺)

誌上厚く感謝致します

法然上人鑽仰會



豆

ま

き

## 村田 嘉久子

こゝ数年、節分會には必ず増上寺の豆まきに、年男ならぬ年女として出仕しておりますが、去年は九死に一生を得るほどの大病をして病院で夢我夢中で寝ていましたから出られませんでした。あとから数えると、豆まきの日は病院へかつぎ込まれた翌日で、そのまゝあの世へ行つていたら、今年のようにこうして豆まきにも出られなかつたであらうと、有難く思います。ことに今年は氏の北品川の天王様でもお招きにあずかつて、年女をつとめ、それこそ神佛かけ持ちの節分會でした。

増上寺では今年は出来上つた大殿の方で行われたので、前年のようにあの高い山門へ上らないですんだだけでも大へん樂うれでした。行列の始まる前、私は病後まだほんとうに回復していませんという譯で、途中から加わるように申渡されていましたから、稚兒や頭連の木遣、袴姿の寺侍衆がずつと大門の方から行列でねり歩

いて山門に入る頃に、列には入りました。椎尾大僧正の後に隨いて渡り廊下から本堂へと静々進みました。短い時間でしたから寒い思ひは少しもせずに済みましたのはありがたい事でした。行列には御法主様のすぐ後に、衆議院議長の大野伴睦さんや、厚相の黒川武雄さん其他いろいろお偉い方々、又山路ふみ子さんなどのお姿が見えました。

前年の豆まきとはすつかり手順が違つていたので、新聞社の寫眞班など、あつちこつちのはりの上へ乗つてカメラを据えていますし、テープ録音器は控へています。その少し前、NHKが録音した讀經が丁度其頃流れて來て居ました。本堂の用意は萬端整つて居りました。

大殿の外陣は豆を拾う人で一ぱい、今年の年男年女は四百人餘りとの事で、本當に盛大を極きまめて居りました。やがて開經偈に始

まつて般若心經が幾度か幾度か繰り返されて讀まれています、その間も待ち切れない群衆が、ざわめいて前の方へ出て居た私の袖をひつぱつて、持つて居る私の柵へ手を入れたりするので、それを如才なく斷るのに随分骨が折れました。

その内讀經がすみ、御法主様が短い御法話をなさつた後、先づ第一聲としてマイクの前で、「福は内！鬼は外！」と大きなお聲でお唱えになりました。それに續いて何百人かが一せいに「福は内鬼は外！」ととなり始めたのですから、それこそ大變な騒ぎでした。

またゝく間に私の柵の中は空っぽになつてしまいましたが、兩方の手の掌を出して待つて居る人、帽子を逆にしてそれで受けて居る人など見ると其まゝ引込むわけにも行かず、どうしようかと思つて居る内に、私をよく世話をして下さる縁山會のある婦人が別の柵を持つて走つて來て下さいましたので、又すぐそれをまき又空になると代りのを持つて來て下さる、という工合で、とうとう阿彌陀様の前に供へてある分まで五六回まいりました。

氣の付いた時は年男や年女の方達は、すでに大方舊本堂の方へ引上げて居られて、私一人が取り残されていましたので、急いで戻らうと迴廊の傍まで來ますと、録音班の係りにつかまり「何か御感想を」と云はれましたので、興奮の覺めぬまゝに、何やら自分でもわけの解らぬ事を話したようでした。平常馴れて居る筈ですのに、矢張こうした時は上つているとみえます。それを終へて

廊下を渡らうとすると、袖を引ばる人があるので見ると、以前戰災で焼出された三田松本町の家のすぐ前の自轉車屋のお内儀さんでした。

眼に一杯涙を浮べて、御主人がつひ先月亡くなられたことを語り、いつも貴女の噂をして居て懐しいので、今日はこゝへ來たらきつと貴女に逢へると思つて……と懐しさうに言いました。この家へは良い防空壕があるので空襲の時よく馳け出して行つては入れて貰つて居たのでしたが、終戦後はお互いに何かと取りまぎれて、久しく逢うこともなかつたのでした。

私はいづれ回向に伺う事をお約束して別れて、廊下を渡つて來ると増上寺の稲田師其他二三の方々が立話しをして居られるので急いでその傍を通り過さうとすると、稲田師に呼止められました。何かと立止りますと其處に立つて居られたのが元宮様の東久邇さまとお伴きの方とでした。

稲田師から何か申上げたのでしよう、東久邇様はニコニコお笑いになりながら「今日は大變賑やかだと聞いたので豆まきを一寸見せて貰いに來ました」と仰しやいました。

それから殿下が御法主様の御部室でお休みになつて、御法主様といろいろ御法談をなさる間、お茶やお菓子運び、和やかなお話を傍で拜聴しました。

あわたゞしく、楽しい節分の日でした。

(昭和二十八年の節分の日)

# 袈裟ぬ焼けにも火



泉 湛 田 鶴

念佛僧に對する迫害は、法然上人六十八歳の時、早くも關東に於て行はれた。

その頃、鎌倉幕府が日と共に次第に勢力を強めて來て、政治の中心は京都からこゝへ移つて來てゐた。

法を弘めるについても、政治的權力の膝元でなければと氣付いたのか、後年榮西や日蓮が鎌倉に注目して、布教の根據地をこゝに置いたやうに、念佛僧も鎌倉へ來て、淨土の教を弘通せんとしたものも少くはなかつた。時には僧の群れをつれて來る念佛僧もゐた。

新しい天地は、新しいものを抱擁する。新宗教の布教には、鎌倉はこよなき天地であつた。かうして念佛僧の努力と共に、鎌倉にも念佛信者が、日と共に増加してゐた。

正治元年八月廿五日のこと、幕下將軍無双の近侍であつた結城七郎朝光の如きは、頼朝の厚恩を思ひ懷舊の情に堪へなかつたので、朋輩と共に、彌陀名號一萬返を稱へた程の信者であつた。

ところが、何を血迷つたのか將軍頼家は、突如念佛禁止の布告を出したのだつた。

それは正治二年五月十二日のことである。

その日、鎌倉で熱心に念佛の教を説いてゐた念佛の名僧等十四人は公問所へ召喚され、烈しい取調べを受けた上、固く念佛禁止を云ひ渡された。

前年十月十三日、鎌倉幕府の基礎を築いた頼朝は、惜しくも五十

三歳の若さで病歿し、嫡男頼家が跡目を嗣いだが、若冠未だ十八歳であり、その上所詮彼は父頼朝の跡を嗣ぐ器量ではなかつた。

で、實權は次第に執權北條時政に移りかけてゐた。

頼家に對する家臣の失望は、大きくなつて行つた。

彼は、日夜色に耽り遊興を事とし、政務を疎かにし投げやり、果ては亂脈となり、執權時政に打ち任せ勝となつた。そのため家臣も疎み出し、殊に安達彌九郎の美貌の愛妾に邪戀を抱くやうになつてからは頼家の放埒非道さを歎き、中には恨を抱くものさえ現はれて來た。これ幸と時政義時の父子が背後にあつて、權力を奮ひ若年の將軍を壓迫するやうになつた。で家臣は、頼朝公若し世に在せばと在世の昔を慕ふことしきりであつた。

父の頼朝は、早くから世の辛酸をなめ、幼少の時から宗教生活に慣らされてゐた。伊豆の配流地にあつた時には、日課を定めて讀經し、父の菩提のため念佛を稱へてゐた程であつた。

頼朝亡き跡、夫人政子は、使を法然上人に派し淨土の法門を問ひ上人からは懇篤なる返書を貰つて、ひたすら如來の大悲を仰いでゐる時であつた。それにひきかへ頼家は、持佛堂に籠つて一片の讀經すらしたためしはなかつた。

「念佛する僧法師は、容赦なく捕へて、袈裟を剥ぎとり、火に焼いて捨てよ」

との嚴命が出たとき、

「いかなる天魔の魅しりしか」

と、人々はいぶかり驚いた。

誰れの讒訴によつて念佛僧禁斷の舉に出たのか、何故念佛僧を、忌み嫌つて禁止を出したのか、むら氣によつてか、彼の肚はわからなかつた。

腹臣の比企の彌四郎は、命を受けると政所の橋の邊りに出向いて頼家の令を忠實に實行し初めた。

往來する念佛僧を捕へては、有無を云はさず袈裟を剥ぎ取るの恥辱を與へた上、群がる見物人の中で見せしめに火を放つて焼き捨てさせた。

「彌陀の教も灰になつて消え失せつ、おゝ袈裟も灰になつたわ」比企は、胸をすかしてゐた。

狂氣じみたこの暴舉を眺めて、人々は舌を鳴らして彈指せぬものはなかつた。

尙も反抗する僧は搦め捕つて牢舎に投げ込み、念佛僧を鎌倉から一掃してくれんものと、彌四郎は苛烈な迫害を加へてゐた。

この非道な行爲に、神佛三寶の冥慮、諸天龍神の照覽も測り難しと嘆じ、天變地異が起るのではないかと、怯れ戦いてゐた。人には前年五月十六日に起つた大地震を想ひだして、一層不安の念に馳られた。

禁止によつて鳴りを靜めると思ひの外、更に根強いものがあつた彈壓をもとせず、鎌倉へ鎌倉へと、念佛僧が入り來つた。

## 二

「あの僧を捕へよ」

彼方からやつて来る念佛僧の姿を眺めて、比企の彌四郎、よき獲物ござんなれと、家來に命じた。

聲に應じて四五人の武士が、ばら／＼つと、彼の前に立ちふさがつて、

「まて、念佛僧」

と、怒鳴つた。

「出家に、何用でござる」

僧は、おちついた態度できゝかへした。

「いかにも、袈裟を脱いで行かれよ」

「袈裟を脱げとは、……はていぶかしい。お汝<sup>おま</sup>たちは盜賊とは思はれぬかの……」

「幕府の嚴命ぢや」

「何！ 鎌倉の御命とな、はて、何を血迷はれたか」

「早く脱げ、袈裟を……脱がぬと剃がしてくれん」

武士は、言葉も荒々しくつめよつた。

物見高い往來のことゝて、忽ちのうちにそこらに、町人や旅の者や、女子供が黒山のやうに集つた。

僧は、伊勢國の稱念房と云つて、道心堅固な念佛僧として、その名鳴り響いてゐた。鎌倉にやつて來た彼は、たま／＼政所<sup>マシヨコ</sup>の橋に通るかゝつたのだつた。

「はて、さわぐではない」

磐石のやうな信念に吐がすわつてゐた稱念房は、怯える容子もなく、武士たちを睨めすえた。彼に威壓されたのか、家來たちは、手

を出すことを躊躇してゐた。

「よつく承はれ、僧の黒衣は、俗の束帶と同じく古來より用ひ來つたものである。何故之を禁ずる必要があらう。又袈裟は、解脱の標幟且つ福田を表すもの、梵天も歸敬の禮服なり、四天八龍も德を仰ぎ給ふ尊き袈裟を剃ぎて、火にくべ焼き捨てんとは、恐らく惡逆の極み之に優るものがあらうか。頼朝公なきあとの近頃の政治の有様を思ふに、誠に言語同斷、民のうれひ、世のうれひを思はず、佛法世法ともに滅亡の期と云ふべきでござる。家門繁榮、天下長久を計る道ではござらぬ」

彌四郎は、怒りに總毛だつて、

「おのれ、政治を擲論する不届者め、搦め捕つて袈裟を剃がせ」  
焦立つて命ずる彌四郎の一言に、捕吏は稱念房を捕へて其の場に引きすえ、否應云はさず袈裟を剃ぎ奪つた。

「大道を歩み、大信をもてる稱念の袈裟は、更に焼けるものではござらぬ。……南無阿彌陀佛……」

泰然と云ひ放つて、念佛を稱へた。

「おのれ廣言な、火に焼けぬとは片腹いたい」

と、腹をかゝへて笑つて、

「その法師にもの言はすな、早く焼きすてゝ追拂へ」  
怒りはますます／＼煽られたと見える。あれよと人々の騒ぐ間に、剃ぎ取つた袈裟を燃え盛る火の中へ投げ込んだ。

稱念房は、みちんも慌てはしなかつた。目を瞑つて念珠おしもんで、一心に念佛稱へてゐた。

人々は、どうなる事かと片唾を呑んで、燃ゆる火の中を、手に汗して見守つた。

燃えぬと、そんな事がよもあるまいと、心の中に思つた。稱念房の言葉を、さう易々と信じなかつたのは當然であつた。

「焼けるか、燃えないか」好氣心で胸をときめかし、中には、どうか燃えないようにと心に念ずる念佛信者もゐた。

そこに、人々も想像もしなかつた不思議が起つた。

袈裟を投げ入れると、今までメラ／＼と燃え盛つてゐた火勢が急に衰へ、果ては燻つて燃え上らなくなつてしまつた。

見守る見物人に、どよめきがわいた。

稱念房は、火の傍へ寄つて、袈裟を取り出して、

「それ、見給へ」

と、笑つて掲げて見せた。

「アレッ！」

と、呆れ顔で見張つた。

「不思議」

「もとのまゝだ」

互に顧みあつて、口々にさゝやき合つてゐる。

念佛の修行から得た彼の法力によるのか、念佛の魔可不思議によるのか、袈裟は片端だも、焼けてゐない。

稱念房の勝利を、我が事のやうに狂氣するものもゐた。平生の比企に對する鬱憤を晴らしたやうな小氣味よさを感じ合つた客子だつた。

彌四郎は、信じられないやうに、自分の目を疑つた。まさかと思つてゐた比企にとつては、大きな驚異だつた。

「ウム」

と、彼は無念さうに苦虫をかみつぶして、唇をかねてゐた。

この目のあたりに見る奇蹟に、比企の家來等は、膽を冷しゾツと肌を寒うして蒼白となつてゐた。

稱念房は、彼等をしり目に、悠々と袈裟を身につけると、

「いづれ方も、彌陀を信じて、念佛唱へられよ、南無阿彌陀佛、……」

と、云ひ捨てて、其の場を立ち去つて行つた。

面目を全くふみにじられた比企は、尙も顔に赫怒の色を現はしながら、いまいましさに稱念房の後姿を見送つてゐた。

燃えたのは袈裟ではなく、禁斷であつた。

さしもの念佛禁斷も、不日に破れてしまつて、却つて世の笑草となつてしまつた、と云ふ。

この事あつて以來、世人は伊勢の稱念房の法力をほめたゝへ、彼の名は、いちどに鳴り渡つたのだつた。

## おしらせ

本會々員神奈川教區川崎市良忠寺住職森本祐顯師は今回、本會へ金參萬圓の御寄附を寄せられた。御尊志に厚く御禮申し上げます。尙、今後本會名譽顧問として、強力な御支持を頂く事になりました。

法然上人鑽仰會

## 芝園だより

○暖冬異變という。海苔がとれぬ

麦がのびすぎるといつて騒いでいる。だが、矢張り冬でも暖かい方がいい。霧の深い早春のような夜道を、めぐろで、良知、淨善兩先生との對談を終えて一人、陶然と歩いて歸る時しみじみ思つた。大體、冬は寒いものと決めたのは誰だ。南半球に行つてみる。——人間、すべて、時と處にこだわらずにきている。もつと、人間独自の世間はないものか知ら。

○眞野先生、中山文化研究所に、前後二回出講。その疲れか、今年は寢正月。正大學長、論文執筆、幼稚園建設。どこから出て来るかとさえ思えるエネルギーも、ついにここで一應補給の必要をみたわけ。どうか。ゆつくりと休養されんことを。

○休養といへば、椎尾先生も懸案の腸の手術をうけられ、その経過良好とか。先生の場合は、むしろ

捲土重來の旺盛さを豫想して、我々小輩は逆にビクビクである。折角の御療養を御祈りする。

○本年は淨土の二十歳誕生の年。思へば、吾々金ボタンの頃、あの華かなスタートが目に見え。及ばずとも、しつとりとして淨土に適した何かを記念したいと考えている。

○淨土の二十歳に引かえて、わが年の徒らに重み加わりて、而もなお斷ちがたい青春の夢に悩む小生あくまでも語り得ぬ凡夫であることよ。(竹中)

○元旦早々から宮城前で大慘事。自己の宗教を持たぬ日本人が、せめてその心の寄り所を象徴に求める悲劇か。本當の獨立を求める民族の悲しきあえぎか。たゞ逆コースでなければよいが。

○滋賀の農村では皆が元旦に寺詣りをして、新年を迎える。しかし宮詣りもする。生活と一枚になつた宗教ではあるが、やはり何かビタリとせぬ悩みを持つてゐる。彼

等には新興宗教の問題など微塵もないが、こうした悩みがある。信仰の宗教として、これ等があるから宗教として、これ等があるからである。

○高橋良和先生の高説も拜聴。「先だつものなど考えずどんどん編輯しろ」と勵まされ、「中外日報寄贈雑誌中ではベストだ」とほめられ熱が上つたり下つたり。

○大雲院の佛教會館工事は大した建築が着々進行。華頂會館は丸で廢墟。寶の持腐れだ。東京にでも欲しい程だが、何とかしてもらいたい。佛教がねむると、會館までねむる。(安居)

○一昨年通り元旦に正月號をお手許へ送りこんで、ほつとして越年した。やりくり(時間的にも)のつらさ切なさも、それで解消。明朗新年ではりきつております。

○二月十五日は大聖釋尊の去りましゝ涅槃會。之に因み本號は森本師の生前の臨終式、須藤師の愛弟の死を歎ずる兩文を載せた。

○正月號の百人首で種々努力願つた方は、新保義道、折原教詮、大橋俊雄の諸氏であつた。

○吉田師のよくこなされた禮讃國語譯は好評なので随時、つゞきを載せて行きたい。

○東京では大雪、みなさんも大變でしたでしょう。(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓十圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 二月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和廿八年一月廿五日印刷  
昭和廿九年二月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順  
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所  
東京都千代田區神田保町一ノ

發行所 法然上人鑽仰會  
東京都港區芝公園五ノ一〇

電話 東京八二一八七番  
電・芝(四三)一三二八

# 大正大學學生募集

## 學部・大學院

### 募集人員

大學々部 二〇〇名

大學院 四〇名

### 學部學科

佛敎學部 佛敎學、梵語、沙土學、天台學、眞言學、宗敎學、哲(東、西)史學、國文學、中國文學、米英文學、社會學、社會事業

### 大學院

夜間授業 佛敎學、日本史、國文學、社會學の各專攻  
文學研究科(佛敎學、宗敎學、國文學各專攻)

### 出願期日

第一次 二月十一日—三月五日(學部)  
第二次 三月九日—三月二十五日(大學院・學部)

### 入試期日

第一次 三月六、七日 第二次 三月廿六、廿七日

### 入試課目

大學—國語、社會、理科、外國語  
大學院—論文、外國語(英・獨・佛の中一)  
(舊制中學卒業者の大學入學認定試験は三月五日)

### 特典

本學独自の獎學生、淨土宗獎學生、日本育英會獎學生  
宗門僧侶資格、教員資格(社會、國語、英語、書道、宗教)社會福祉主事資格

## 高等學校(夜間)

### 人員

第一學年(宗教科)各四〇名、他學年若干

### 試驗

三月二十八日

入學案内は二〇圓切手封入申込まれたし。  
東京都豐島區西巢鴨四丁目(都電・バス・西巢鴨下車)

## 淨土トラクト

B六、十六頁 價十圓送八圓  
五十部以上 二割引  
百部以上 二割引

淨土編集部編

## 信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知つておきたい「淨土」の  
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・  
其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけさ・佛式作法一  
りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

## 一枚起請文

(再版出來)

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、  
かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

## 淨土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上二、八圓  
三百以上一、五圓  
送、五十部 每八圓

大野法道著

## 五重の話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を傳え、  
どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説さ  
れたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本とし  
て大へんよろこばれています。

會仰鑽上人然法